



ふくしまイレブンとは、福島県の多彩な農林水産物を代表する生産量が全国上位の11品目です。毎月おいしいアスリートを紹介します。

なしでなしのなし

ふくしまイレブン 背番号5番 なし

時々、隣の家の窓辺に寝そべっている猫と目が合う。

もともと動物は嫌いな方じゃないのだが、あの猫はどうもいだけない。つんとすました態度、気分屋なところ、主人に対して嫌に愛想がいい、といったありていな猫特有の性格のせいではない。気づくと、いつもこちらをじっと見ているのだ。

私がおまえに用事はない、と独りごちてみる。背中を向ける。じっと見つめている、猫の視線を感じる。

なんなのだ。そもそも、人をそんな風にじろじろ見てはいけません、と親から教わらなかったのか。今の親はどういう教育をしているのだ、と吠えたくなる。

人はこういう場合に、心を落ち着ける方法をいくつか持ち合わせているものだが、私の場合、漢詩だ。遠い先祖は中国生まれのせいかな。はたまた、私の「新高」という日本人とは思えないネーミングのせいかな。漢詩の暗唱は波打つ心を静めてくれる。特に、李白の詩が好きだ。

「おい、お前」
出窓の向こうから声がする。猫か。こういう時は心を無にする。世に問う何の意ぞ碧山に晒むと……

「お前だよ、こら」
心が乱されてはならない。敵の思いつぼだ。笑って答えず心自ずから閑なり……

「新高！」
名前を呼ばれてはっとして振り返る。そこにいたのは、例の猫ではなかった。

「に、二十世紀先輩！」
お前、と声をかけてきていたのは、なし業界では大先輩の二十世紀さんだった。

「おい、お前聞こえてただろうが」
「す、すいません。ちょっと気づかなくて。」

嘘だ。気づいていたが、猫に話しかけられているのかと思っ
て無視したのだ。自分の発言に耐えかねて、ことばを接ぐ。

「いや、あの……二十世紀先輩。私は嘘をついていました……」
「もういいよ、お前相変わらずめんどうくせえな。もつとシャリシャリッとしろよ」

私の中で、何かがひっかかった。

「……もつとシャリシャリッとするか？」

「そうだよ、俺みたいにシャリシャリッとしろよ」

「先輩。それは……私に個性を捨てると、そういう意味ですか？」

「いや、そういうんじゃない……」

「いくら先輩でも、それだけは、それだけは無理です。私、シャリシャリはだめなんです。どうしてもシャリッとしたいんです。シャリシャリッじゃなくて……」

「うるせえ、うるせえ。わかったよ。俺もう帰るわ。じゃあな」

けっきょく、二十世紀先輩がどんな要件で私のもとに来たのか、わからないまま先輩は去った。少し傷ついた私は、再び漢詩を唱え始めた。桃花流水杳然として去り……。桃花……。そういえば、桃の季節はそろそろ終わる。

「おい、お前」
二十世紀先輩が再び声をかけてくれたかと、振り返る。が、そこにいるのは、例の猫だった。

「お前、随分でかいじゃないか。本当になしかなしでなしか？」
なしでなし、でなし。もとい、なしである。

「おい、お前本当になしかなし？」
図体がでかいことで、小学校時代に「なしでなし」と呼ばれた記憶がよみがえる。しかし、いつか「なしでなし」という呼び名が、褒め言葉と言うことに気づいていた。

「なしでなし、で結構」
私は猫に背中を向けた。そして、ゆっくり、満たされた気持ちで、また漢詩を唱え始めた。

福島県では、甘みが強くみずみずしい「幸水」「豊水」「二十世紀」のほかに、大玉の「新高」が作られています。全国に先駆けて農薬を使わない害虫防除の方法を確立し、食の安全安心に配慮。さらに見た目ではわからない味を調べるために「光センサー選果」を導入し、糖度を保証したなしを出荷しています。だから、「しゃりっ」とした歯ごたえ。ふくしまの甘いなし。



なし